

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目 西田哲学の根本経験とその論理 ～「悪」の問題を中心に～

申請者氏名 唐 露 (TANG LU)

本論の目的は、西田哲学の奥底に一貫して潜んでいる「根本的な立場」すなわち「根本経験」が如何に深化したのか、また、その「論理」が如何に発展したのかを明らかにすることにある。先行研究ではその解明が各方面からなされているが、「悪」の問題という視点による考察は取り残されているように見える。「悪」の問題とは、通常考えられている道徳上の「善悪」の問題ではない。西田哲学において、それは根本的には宗教的「罪惡」の問題であり、すなわち人間存在の本質にある人間そのものをも「絶対否定」する「悪」的な本性である。例えば、キリスト教における「原罪」、仏教における「迷い」はそれを指している。

従来の研究では、「悪」の問題は西田の中後期の課題として、初期『善の研究』の段階には十分に自覚されていないと指摘される。それ故、多くの研究は『善の研究』を未熟なものとして捉え、その論理の中に「絶対否定」の側面が認められないと主張する傾向がある。本論は初期の代表作『善の研究』を再解釈し、「悪」という視点から西田哲学を見てゆき、西田幾多郎の思索に一貫している「根本的な立場」、「根本経験」とその論理について、新たな解釈の可能性を探っている。

第一章では、まず、西田哲学の「根本経験」「根本的な立場」の深化、及びその「論理」の展開を明らかにする。そして、「根本経験」の内実を「心霊的经验」あるいは「心霊上の事実」として考察し、それと「悪」の問題とどのように関連するのかを論じる。

その結論として、①西田哲学の「根本経験」「根本的な立場」は、初期の「純粹経験」から最晩年の「絶対矛盾の自己同一」に深化していることを明らかにする。それはまさしく「心霊上の事実」として捉えられ、宗教的「悪」の問題に他ならない点があげられた。②その「論理」は「純粹経験」から「歴史的生命の自覚、ポイエシスの自己の自覚の論理」として深化されることが明らかになる。したがって、③「根本的な立場」＝「根本経験」がどこまで展開しても、西田の思索のあり方が「すべてそこからそこへ」という特徴を持っていることを論証する。その上に、④「悪」の問題が、『善の研究』から『場所的論理と宗教的世界観』へ到る根本経験を深める根本的な問題であることをはっきりさせる一貫した切り口であることを論じる。

第二章では、「悪」の問題を切口として、「独我論」の超克をめぐって、初期西田哲学の『倫理学草案第二』と『善の研究』を考察する。それぞれの「宗教」論は章立てにおいて対応していることに着目し、「宗教的要求」「宗教的体験」（見神の事実）「神」「神と人間の関係」という四点から『倫理学草案第二』と『善の研究』とのテキストに即した比較研究を行う。

その結論として、①「我々の自己」における「真の自己」と「偽我」とはどこまでも矛盾していながら、「偽我」がそのまま「真の自己」と一体になっている構想を主張する。したがって、②『善の研究』において、「悪」は明確な課題として問題化されていないにも拘わらず、「自己」の問題、とりわけ、「偽我」の転換の問題という視点から、「悪」の問題の潜在を主張し、それが「純粹経験」の立場の成立によって解決されることを論証する。なお、③「純粹経験」の直観の立場に立つことによってその背景にあった「独我論」から脱することに成功したと主張する。それによって、『善の研究』においては、「悪」の問題が萌芽的に含まれているという結論に達する。しかしながら、④『善の研究』の論理は「す

べてを純粹経験として考える」ところから出発しているので、「悪の問題」の解決が論理の発展を待たねばならないのである。

第三章では、まず西田哲学の集大成である「場所的論理」を辿り、そして、これまでのポイントを引き継いで、最晩年の代表作『場所的論理と宗教的世界観』についても、「宗教的要求」（宗教心）「宗教的体験」「神」「神と人間の関係」に焦点を絞って考察することを目指している。その上で、『倫理学草案第二』『善の研究』『場所的論理と宗教的世界観』において、「悪」の問題をめぐって、西田の根本経験がどのように深まっていくのか、またそれはどのように論理化されたかを論じてみる。

その結論として、①「罪惡」は、単に「我々の自己」の方向において考えるのではなく、自己の「絶対的自己否定」と神の「絶対的自己否定」が相互に出会う場、いわば自己と神との「逆対応的」な関係から捉えられるのである。②「我々の自己」の「絶対的自己否定」が「絶対者の自己否定」によって成立すると共に、「絶対者の自己否定」と相互に働く場において、「絶対否定即肯定」的に、「真の個」＝「真の自己」が成立するのである。このような「我々の自己存在」の「根本的な自己矛盾的事実」は、宗教的「罪惡」と救いの問題において最もよくその内実を表すことができるのである。③「我々の自己」はその根源で神に触れることは、かえってこの現実の「世界」の「唯一の個」と自覚し働くことに他ならない。すなわち、「我々の自己」はその日常活動の一步一步において、逆対応的に「神の自己否定」に触れてそれによって自己の「悪」を自覚し、それを悔い改めて「真の自己」となるのである。したがって、「悪」の問題は常に我々の働きに見られ、しかも、そこで解決されている。

全体を通して本論が明らかにしたのは、西田哲学の「根本経験」「根本的な立場」は西田幾多郎の思想に通底している「心霊的经验」あるいは「心霊上の事実」であり、その内実は宗教的「悪」の自覚と救いに他ならないことである。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 184 号	氏 名	唐 露
論文題目	西田哲学の根本経験とその論理 ～「悪」の問題を中心に～		

(論文審査概要)

「はじめに」では、西田哲学の奥底に潜んでいる「根本的な立場」「根本経験」がいかに深化し、発展したのかを明らかにするとの目的が述べられる。そのさい、従来の研究がみてこなかった「悪」の問題という視点から考察するとの方法が提示される。なお「悪」の問題とは道德上の善悪ではなく、宗教的な「罪惡」の問題、人間存在そのものも否定する本性をさしている。

第1章「根本経験—心霊上の事実とその論理の展開」では、西田哲学における「根本経験」は、初期の『善の研究』においても最晩年の『場所的論理と宗教的世界観』においても「心霊上の事実」であり、この「根本的な立場」が「純粹経験」、「自覚」、「場所」へと変遷してきたことが述べられる。そして「根本経験」は西田の場合「宗教的体験」にはかならず、その体験は「悪」ないし「罪惡」の問題と深く関わっている。したがって「悪」の問題が西田の「根本経験」を深める切り口となっていると述べられる。これまでは『善の研究』において「悪」の問題は深く自覚されてこなかったが、本論文では「根本経験」および「根本的な立場」は西田において一貫しており、「悪」の問題を通じてそれらが深化していったことを明らかにするとしている。

第2章『善の研究』の立場では、「純粹経験」の立場は「一般的或る者」の「自発自展」であり、それは「独我論」の克服の結果として現成するものだとする。その際「独我論」の問題が「悪」ないし「偽我」と関わることになる。『善の研究』第3・4編の検討を通じて、「偽我」ないし「悪」は神の無限の愛に触れることで、自らを「偽我」であったと知り、かくして「偽我」が真に「偽我」となることを通じて「偽我」でなくなると同時に、「真の自己」も「真の自己」でなくなることによって「真の自己」になるとされ、そこにおいて「独立自全の純活動」の「直観」が開かれるという。こうした「悪」の問題の解決は、『善の研究』の内部におけるものであるが、『善の研究』の背景となっている「倫理学草案第二」においてどこに「独我論」が認められるか、また独我論が如何に『善の研究』において解決されるのかをつづいて明らかにしている。その際「宗教的要求」「宗教的体験」(見神の事実)「神」「神と人間の関係」という四点から「倫理学草案第二」と『善の研究』とのテキストに即した比較研究が行われている。

第3章『場所的論理と宗教的世界観』の立場では、最晩年の代表作『場所的論理と宗教的世界観』についても、「宗教的要求」(宗教心)「宗教的体験」「神」「神と人間の関係」という観点から、「悪」の問題をめぐって西田の根本経験がどのように深まっていくのか、またそれはどのように論理化されたかを論じようとしている。

「おわりに」では、以上検討を通して、西田哲学の「根本的な立場」とは、その思想に通底している「心霊的経験」であり、その内実には宗教的「悪」の自覚と救いに他ならないことを明らかにできたとする。

1. 創造性

「悪」の問題を中心課題として、そこから西田哲学を貫く「根本的な立場」を分析する研究は見当たらないという研究状況の中で、本論文は『善の研究』の執筆以前に「悪」の問題が所在したことを明らかにし、「悪」の問題という新しい視点から西田哲学の「根本的な立場」・「根本経験」が西田哲学を貫いていることを論じており、創造性については達成できている。

2. 論理性

第二章で『善の研究』各編、および『倫理学草案第二』『道德論』『宗教論』の綿密なテキスト解釈を行い、第三章では『宗教論』の精緻なテキスト解釈に基づいて、西田哲学の「根本経験」に「悪」の問題が所在しているとの仮説が検証されており、一貫性のある展開から結論が導かれている。したがって論理性について達成できている。

3. 厳格性

主要な先行研究における核心的な主張はほぼ渉猟されている。また論証はすべてテキストに基づいているが、その解釈は綿密である。したがって証明資料・方法はきわめて厳格に用いられており、厳格性については達成できている。

4. 発展性(選択的記述項目)

西田の思索を「根本経験」にまで遡り、かつ西田の生涯を貫くものを明らかにするといったテーマを自覚したうえで、そのことをテキストの厳格な読解に基づいて論証するという研究枠組みや方法は、今後の学会における研究活動を示唆するものとして期待できる。したがって発展性については達成できている。

以上より、審査委員会の合議によって論文審査を「合」と判定した。

論文審査結果

⊕・否

審査委員 主 査 (氏 名) 森 下 敬

(氏 名) 有 元 光 彦

(氏 名) 石 井 由 理

(氏 名) _____

(氏 名) _____